

# 聖女騎士団のヒメゴト

上田ながの

表紙イラスト：あかめ



試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『聖女騎士団のヒメゴト』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 聖女騎士団のヒメゴト

上田ながの  
表紙／あかめ

# 登場人物紹介

## Characters

---

### クリス

聖女騎士団に入隊することになった見習い騎士。オマーラ様を持っている。

### ステラ

聖女騎士団の団長。男嫌いで、色めいた話も好きでない堅物。

### ニーナ

クリスの幼馴染み。クリスと共に騎士修行をした仲。

『いいことクリス。貴方の股間に生えているソレは、幸運の証です。他の者には生えていない。選ばれたものの証なのです。だから貴方は必ず聖女騎士となれます。それがある限り、幸運は貴方に味方してくれます』

クリスⅡセリードⅡアージアが自分が他人の身体と少し違うと気づいた時、母が言い聞かせてきた言葉がそれだった。クリスにとつて母の言葉は絶対である。母が幸運の証というのならば、その通りなのだろうと自然に受け入れることができた。

『それじゃあボクのこれは悪いものじゃないんですね』

『……その通りよ。ただし』

だからこそ、安心して笑顔を浮かべることまでできたというのに、次に見せた母の表情は非常に恐ろしいものだった。

『ソレは決して誰にも見せてはいけません。いいですか、母以外にソレを見せれば、たちまち貴方に不幸が訪れます。いいですか、もし見られたり、ソレを疑うような心を持てば、ソレは硬くなり、大きくなつていきます』

殺気さえも感じさせるような表情。正直この時の母の表情は忘れることができない。

『お、大きく？』

『そうです。そして限界まで膨れ上がったその時、ソレは爆発し、貴方は死んでしまうのです。母のいつている意味が分かりますね？』

恐ろしい言葉だった。

『は、はい……』

震えながら頷くこと以外に、何ができただろうか？

『素直で宜しい。それに、そんなに怖がることはないわ。いったでしよ？ 見せさえしなければ、貴方は幸運になれるんです。安心しなさい。もしソレ——オマーラ様がお怒りになつても、静かにしていれば怒りは収まります。お怒りの間は、ひたすら謝つて堪え凌ぐんです。そうすれば、死ぬこともありません。だから大丈夫』

怯えるクリスに対し、そういつて母は笑つた。

数年後、母の言葉は現実となる。

\*

「合格？ ボクが？ 聖女騎士団に？」

聖女騎士団入団試験に合格したとの通知が、クリスの宿所に届いたのは、試験から一週間後のことだった。

聖女騎士団は百年以上も続いた伝統騎士団。入団条件は女であることと、学問、武芸、礼儀作法などといった様々な試験を突破することである。これを受ける女性の数は千人近くにも上るのだが、合格できるものはその中でも数人、下手すれば合格者なしの年もある程過酷なものだった。

であるからこそ、クリスは混乱してしまふ。

「本当にボクが？ 聖女騎士団に？」

正直信じられなかった。幼い頃から騎士団に入る為の修練を積んできたとはいえ、まさか本当に自分がなれるとは……。

驚きのあまり、視線をきよきよと彼方此方に漂わせ、落ち着きなく室内を歩き回つてしまふ。騎士というにはあまりにも情けない姿だった。ただ、そんな姿を晒しても、少女の可愛らしさは損なわれない。

少し丸みを帯びた顔に、肩の辺りで切り揃えた美しい銀髪。青く深い瞳が神秘的なものまで感じさせる。すつと通つた鼻筋が、気品のようなものまで醸し出していた。身体つきは女性というにはあまりに貧弱で、凹凸など欠片も感じさせない。とはいえ、それが子供らしい可愛らしさを更に強調していた。まるで人形のようにすらある。

（や、やっぱりこれの……幸運の証のお陰なのかな？ いや、きつとそうだ。そうに違いない。だったら、だったら御礼をしないと）

混乱しつつも、少女は自分一人しかいない宿所でポンツと手を叩くと、自らズボン脱ぎ去つた。そのまま下着も下ろす。白く、細い足が剥き出しになり、人として隠すべき股間部も露になる。そこには、決して女にはある筈のないものが存在していた。

「あ、ありがとうございます。オマール様。貴方のお陰でボクは憧れの聖女騎士団入団試

験に合格することができました。全部貴方がボクの身体に生えているお陰です。本当にありがとうございます」

ソレは紛うことなきペニス。男性生殖器である。既に皮がペロリと剥け、には相応しくない程の威容を湛えていた。そんなモノに向かつて、本気でクリスは感謝の言葉を述べ、頭を下げると、手を伸ばし、肉棒を小さな掌で包み込んだ。そのままゆつくりと三回だけ扱く。

「んくっ！ くっ……あ、ありがとうございます」

やるのはただそれだけ。扱き終わると同時に、再びクリスは頭を下げた。

（母上から教えてもらった御礼の御呪い……正直こんなのが生えてるのは気持ち悪いって思うこともあるけど。おしつこもここから出るし。それに、オマーラ様のお陰で騎士にもなれたし。感謝してます）

少女——少年騎士は、ペニスが生えていることの本当の意味を知らない。母が教えなかったからだ。クリスの母は元々聖女騎士団の人間である。それも騎士団長。それ故なのか、騎士団に対する思い入れは尋常ならざるものがあつた。自分の娘も必ず騎士に——最早強迫観念のようなものだったのかも知れない。

クリスは自分が男であることすら、教えられていなかった。

\*

数日後、少女少年騎士は聖女騎士団の屯所にいた。聖女騎士になるに当たつての説明を受ける為である。

(きよ、今日からボクも騎士になるんだ……)

騎士の儀礼服に身を包んだ小柄な身体が硬直していた。

(うう、やっぱ来るんじゃないかな。は、母上にしつかり頑張れていわれて来たけど……や、やっぱりボクなんかじゃやっていけないよ。か、帰りたい……で、でも……)

静かな緊張感が耐え難い。今すぐにでも逃げ出したかった。が、それは絶対にできない。もしここで逃げ帰れば、母はクリスを許してはくれないだろう。あの母が怒り狂った姿を想像すると、それだけで胃がキリキリと痛くなってくる。

だからこそ、絶対にここで帰るわけには行かない。

(ホントに殺されるかも……)

想像するだけで、ゾゾツと背中中に冷たいものが走った。

(ま、守ってくださいお、オマール様。ボクをお守りください)

ポケットに手をつ突っ込んでペニスに触れながら、自分の気持ち悪い守り神にお願いする。「済まない。待たせたな」

部屋の中に一人の女性が入ってきたのは、そんな時のことだった。

白い儀礼服を身に着け、腰にレイピアを差した一人の女騎士。クリスとは比べ物になら

ない程膨らむ胸元に、キュツと細まった括れ、膨らむ腰に長い脚を持った美しい女性だった。腰まで伸びる金色の髪が、サラサラと靡いている。まるで絵画の中から抜け出てきたかのようにすら見えた。

（あ、こ、この人は……す、ステラ様……ステラレインノールレディス様だ！）

聖女騎士団に入団しようとする者が知らぬ筈がない。現騎士団長であり、歴代団長の中でも屈指の武技を持ち、銀色の流星とまで呼ばれたハクティアミルドアージア（因みにクリスの母）に勝るとも劣らないとまでいわれる人物である。

慌てて少女騎士見習いは立ち上がると、麗しの騎士団長に対して敬礼した。

「あ、あのっ、あのっ……ぼ、ボク——じゃ、じゃなくて、私は……」

何だかんだいいながら、クリスは聖女騎士団に小さな頃から憧れを抱いていた為にどうしても緊張してしまう。先ほどまで帰りたいと思っていたのに、本物の聖女騎士を前にすると、そんな思いさえも吹き飛んでしまう。身体は硬直し、何だかぐらぐらと視界が揺れた。「そんなに慌てる必要はない。もう少し落ち着くんのだ。私を相手に緊張してどうするクリスレイドアージア」

そんな姿を見かねたのか、苦笑しながらステラが口を開く。

「あ……ぼ、ボクの名前……」

「知っついて当然だろ。これからクリスは私達の仲間になるんだからな。それに……君は

ハクティア様の娘でもあるしな」

「え？ は、母上のことを知っていますか？」

少し驚く。確かにハクティアは以前の騎士団長であるが、それは十数年以上も前のことだ。こんな場面で母の名が出てくるとは思いもよらない。

「当たり前前だ。ハクティア様は私が最も尊敬している方だからな。だからこそ、クリスにも期待している。励めよ」

口元に微笑を浮かべながら、ステラが手を伸ばし、ポンポンッとこちらの頭を撫でてきた。優しい手の感触。とても温かい。

「——あ——が、頑張ります！」

この人の為だったらどんな辛いことでも耐えられるような気がした。クリスは拳を握り、力強く宣言する。

「ああ、頼む」

優しくステラが笑う。

（す、凄く綺麗だ……）

そんな騎士団長が、とても美しく見えた。見ているだけで頭がぼうつとしてくる。何だか身体まで熱く……。

「んあっ！」

てるみたいだ」

「い、いくなっ！ んんんんっ！ そ、そんなとこやめっ！ んあっあっあっ！」  
甘酸っぱい味が舌に広がっていく。舐めれば舐める程、パクパクと肉孔が淫らに花開いていった。上がる声の中には甘い響きが混ざり始める。湿り気を帯びた嬌声が、室内に響き渡った。

騎士団長のこの反応に、クリスの興奮も高まっていく。ただでさえ勃起していた肉棒が、射精前よりも硬く、大きくなっていた。自然と少年騎士は空いた手を肉茎へと回す。ペニスを抜く快楽を覚えてしまったが故の、無意識の行動だった。

しゅこっしゅこっしゅこっ！ ちゅぶっ、ぶちゆるうっ！

肉棒と膣口——二つの性器が淫らな音を奏でる。

「あ、頭が……頭がボウツとしてきます。気持ちよくて、ステラ様のここが温かくて……」  
自分でも何をしているのか分からなくなっていた。

最早我慢などできない。摩擦で火傷でもしてしまうのではないかという勢いで、肉棒を抜きたてていく。

「……んっんっんっ……はあ……も、もう私はいいい……く、クリスのおちんちん……オマール様が、す、凄く辛そうだ。だから……」

当然その行動はステラにも気づかれてしまう。騎士団長はどこか艶やかな表情を浮かべ

ながら、股間に吸いつくクリスの後頭部に手を添えてきた。そのまま無理矢理膣口から頭を離されてしまう。

「あつ！ ま、まだ、まだ駄目ですよ！」

何が駄目なのか分からない。けれど、もつと舐めていたかった。だから抗議の声を上げるのだが、ステラは首を横に振る。

「もう口でしなくても、私のここは十分濡れてる。だから……」

そこで騎士団長は一度言葉を切り、息を飲むと――。

「もつと気持ちいいことをしよう」

意を決したように一言呟いた。

「も、もつと気持ちいいこと？」

彼女の言葉の意味が理解できない。しかし、肉体は敏感に反応した。

肉茎に数本の血管が浮かび上がる。先端部がヒクヒク震えながら、白濁混じりの先走り汁をどろりと零した。このクリスの反応と同じく、ステラの膣口からも新たな愛液が流れ落ちる。

「な、何をする……んですか？」

「大丈夫。こ、怖がることはない。クリスの苦しみを、発散させてやるんだ。わ、私は騎士団長だから、部下を、仲間を……家族を苦しめるわけにはいかないから。それにな、こ

ここに挿入されると、もっと幸運になれるんだ。不幸なんかなんでもないくらいにな」  
語りながら騎士団長は右手で肉莖を掴む。かと思うと、ステラはクリスの上に跨がるよ  
うな体勢になり、ゆつくりと腰を下ろし始めた。

ちゅくつ！ くちゆるつ！

「あつ！ さ、触ってます！ ぼ、ボクのおママー様が……す、ステラ様の……」

「マ○コ……。お、オマ○コっていうんだ」

「お、オマ○コ様に……」

肉先と膣口が口付けをする。それだけで肉褻が龟头部に吸いついてきた。この光景にクリスの視線は釘付けとなってしまう。同様にステラも、異常状況に興奮しているのか、熱に浮かされたような表情を浮かべていた。自ら積極的に淫らな言葉さえも口に出す。

そのまま騎士団長は、更に腰を下ろしてきた。

ぐぶじゅつ！ じゅぶぶぶぶつ！

「んくあつ！ ふうつふうつ！ ほ、ほら、み、見えるか？ く、クリスの、クリスのおちんちんが、わ、私のま……マ○コつに、は、挿入はいってくるぞ！ あつあつあつ！」

「あ、す、すごいっ！ か、絡んできます！ あ、温かいお肉が、ぼ、ボクに絡んでくるっ！ き、気持ちいいですっ！」

媚肉の海に肉棒が沈み込んでいく。膣壁が絡みつくように肉莖を包み込み、キュウツと

締めつけてきた。手や口で受けた奉仕以上の肉悦を感じる。

ぶじゅっ！　じゅぶぶっ！

潤滑液となった愛液によつて、膣奥へと進むペニス。やがて先端部が、ステラの胎内にある何かに触れた。

「あ、あた、当たってます。何かが当たって……」

「だ、だいじょうぶっだ。そ、それっは……」

一瞬ステラに怯えるような表情が浮かぶ。だが、すぐに彼女は騎士団長として部下を安心させる笑みを浮かべると、

「し、処女ま——くうっ！」

ブヂッ！　ブヂブヂブヂイッ！

いいながらステラは僅かに躊躇った後、蜜壺の奥の奥へと肉棒を導き入れた。何かを突き破るような感触を覚える。同時に騎士団長との結合部からは、破瓜の血が一筋流れた。

「あ、す、ステラ様っ！　ち、血がっ！」

尊敬する人が血を流している。この状況にクリスは混乱を覚えた。が、ステラは笑う。笑いながら、寝ていた少年騎士の上半身を起こし、抱きしめてきた。

「こ、これはいい、いいんだ。け、怪我じゃないから。んっんっんっ！　そ、それに、い、一緒になつてると気持ちいいから。い、痛くなんかないんだ！　んあああっ！」

優しく笑いながら、ステラは自ら腰を振り始める。昂った肉体は、破瓜の痛み以上の肉悦を彼女に覚えさせていた。

クイツクイツとリズムカルに騎士団長の下腹部が蠢く。そのたびに肉棒が出たり入ったりを繰り返した。ヒダヒダがカリ首を撫で上げる。肉茎に絡んだ媚肉が、外側にペロリと捲れ上がるのが見て取れた。あまりに淫らな光景に、クリスの息も更に荒くなっていく。

「はあっはあっはあっ！ う、動いてる！ 腔中なかで……ひんまんっ！」

腰を動かすたび嬌声を上げるステラの瞳は潤んでいた。上気した頬に汗が浮かぶ。剥き出しになった下半身も、真っ赤に染まっていた。

「き、気持ちいいです。こ、こんなの初めてで、ぼ、ボク……ボクッ！」

ぶじゅぽっ！

「んひっ！ あっあっ！ お、おっく！ すごっ！ お、奥にと、届いてる！ あっ！  
んひっんひっんひいっ！」

最早されるだけでは我慢がならない。少年騎士は愉悦に溺れながら、自らも腰を動かした。始めた。騎士団長の膣奥へと肉先を叩き込む。唐突なクリスによるピストン開始に、ステラは瞳を見開き、これまで以上の嬌声を上げた。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

「だ、だつめだ！ そ、そんなつに、う、うごつくな！ ひっひっひんまんっ！ あ、当

たつて、おちんちんが奥に当たつてる！ んひひひひひひ、ひゃあああああつ！ き、気持ちいい！ わ、私も、私も気持ちいいぞ！」

「あ、溢れてきますすつ！ す、ステラ様のマ○コから、お、お汁が凄い溢れて、ぼ、ボクのおマ○ラ様に絡んできますす！」

少女のような少年と、美しき女騎士がベッドの上で互いに腰を振りあう。肉先と子宮口が触れあうたび、ステラの陰部からは新たな愛液が失禁でもしているかのように溢れ出し、少年騎士の下腹部とベッドを淫らに濡らした。

挿入を繰り返す肉棒は、一突きごとに更に大きさと熱気を増していく。最早肉先は破裂しそうな程に膨張していた。

「い、いいですか？ ステラ様も気持ちいいですか？」

膣壁が絡む感触、正直クリスの我慢は限界に達している。いつ射精してしまってもおかしくはない。それを少年騎士は必死に耐える。こんな状況でも、ステラのことを気にしていた。自分だけでなく、彼女にも気持ちよくなって欲しい。

「い、いいっ！ く、クリスのおち、ちんちん凄く気持ちいい！ こ、こんなに、よ、よかったです！ あっあっあーあーあーっ！ し、知らなかった！ く、クリスも、クリスも気持ちいいか？ 私の膣中は気持ちいいか？」

「いいです。ボクも凄く気持ちいい！」

二人で正直に快樂を告白しあう。

ぐじゅぽっぐじゅぽっぐじゅぽっ！

牆壁が更にペニスに絡む。ステラは両腕をクリスの背中に回し、爪を突きたてながら、より激しく腰を振ってきた。

「す、ステラ様あつ！」

声を上げ、抱きしめてくるステラの上着を半分脱がし、剥き出しになった首筋にキスをする。ちゅずるっ、ぶじゅずるっと淫らな音を立てることすら厭わない。女騎士団長の首筋は真つ赤に染まった。

「だつめっ！ んひあつ！ おつくっ！ わたっしのま〇っこがあつ！ イツく！ 私イッくうっ！ あんんんんん！」

遂に女騎士が限界を告げる声を上げる。イクということがどういことなのか分からなかったが、それが気持ちいいことを表しているのだということは理解できた。

「い、イって、イってくださっい！ ぽ、ボクも、ボクもおっ！」

それが嬉しい。だからより激しく膣奥を突く。既にクリスの肉棒も限界だったが、ステラを気持ちよくさせたいという一心から、必死に少年は我慢し続けた。

「はんんんんっ！ も、もう、もうわたっし、私はあつ！」

「おっおっ！ で、出ちやうっ！ ま、また出ちやいます！ し、白いおしっこ、白いお

しつこがす、ステラ様の中につ！」

搔き混ぜられる膣と、搔き混ぜる肉棒。二つの性器が共に限界まで押し上げられる。二人は共に腰を相手へと押しつけあい、そして――。

「で、でつる！ おしつこ出るうっ！」

びゅぶばっ！ どびゅっ！ どつびゅどつびゅどつびゅどつびゅどつびゅるるるっ！

「んああああっ！ な、ながれこんでくつる！ セーシ！ く、クリスつの、セーシが、わ、わたしつの、私の膣中にな、ながれってくるっ！ んああああっ！ じっくり、私も、私もイクツ！ イッチャうっ！ ひゃんっ！ ひゃあああーんっ！」

多量の精液がステラの膣中に向かって撃ち放たれた。ドクツドクツと痙攣しながら、先ほどまで処女だった女騎士の蜜壺を埋め尽くしていく。染み込んでいく熱液。その刺激に、女騎士の肉体も限界を突破する。

「あっあっあっあっあーあーあーっ！」

あられもない嬌声を上げながら、背中を弓形に反らし、ステラも達した。キュウツと蜜壺が収縮し、肉棒を締め上げる。同時に結合部からは、プシュツと愛液が噴き出した。

二人の身体から力が抜けていく。永遠にも似た快樂の余韻に、騎士達は沈み込んでいった。抱きあったまま、快樂に酔いしれる。

「す、ステラ様……ぼ、ボク……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**